

# 社会教育施設評価書（目標設定・実施結果）

対象施設	県立近代美術館	対象年度	令和5年度
------	---------	------	-------

評価委員	
日本博物館教育研究所 理事長	小笠原 喜康
公益財団法人東京都歴史文化 財団 アーツカウンシル東京 企画部 企画課長	佐々木 秀彦
和光大学 経済経営学部経営学科 教授	平井 宏典

自己点検による目標値の達成度		
評価基準（全館共通項目 の中柱単位で評価）	「達成」 目標値 $\geq$ 100%	○
	「ほぼ達成」 目標値 $\geq$ 80%	△
	「未達」 目標値 $<$ 80%	×

## 1 全館共通項目

大柱	中柱	取組の内容		自己点検		
		1年間の 目標値	実現方策	達成値	達成度	課題・対応の方向
利用状況	利用者満足度	95.2%	アンケートに示された意見を活用して改善を行う	95.5%	○	利用者からのアンケート要望などを丁寧に読み取り、対応に努めるなど引き続き満足度向上に努める。
		第三者評価				
		評価のコメント及び今後の方向性等の提言	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 満足度に関しては高く評価できる水準に達していると考えられる。利用者アンケートは比較可能性から内容を統一することは重要だが、今後は、取組別・内容別等多様なアンケート（チャンネルも含め）を取ることで利用者の声を経営に反映することを検討してはどうか。</li> <li>○ 利用者アンケートの結果は良好のようにみられる。ただしこうしたアンケートは、良い結果になる傾向が強いことから、この結果に満足することなく、あえて否定的な意見を中心に集める等の工夫等、来館者研究の他の手法も採り入れて、改善の方策をさらに探ってもらいたい。</li> <li>○ 利用者アンケートの結果について示された課題については、これをPFI事業者とともに速やかに解決できるように努力することが求められる。</li> <li>○ 展示作品に添えられるラベルやキャプションの字が小さすぎるように思われる。近年は高齢者が多いことから、もう少し大きくてもよいのではないか。</li> </ul>			

大柱	中柱	取組の内容		自己点検		
		1年間の目標値	実現方策	達成値	達成度	課題・対応の方向
利用状況	入館者	70,000人	広報に努め一層の集客を図る	87,775人	○	引き続き魅力的な展示・講座を実施し、入館者数の増加に努める。
		第三者評価				
		評価のコメント及び今後の方向性等の提言	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 引き続き目標達成に努められたい。</li> <li>○ 目標値が適正かどうか、どのように7万人という数値を設定しているのかというメタ評価も必要であると考えられる。</li> <li>○ コロナ前の平成30年の入館者数が、141,145人であり、コロナ終盤の令和4年度(2022年度)の入館者数は、101,144人であったのに、コロナ後の目標値を70,000人に下げたのは適正であったかを検討されたい。</li> <li>○ 個性的な展示に努力していることから、一定の支持層がいるものと思われる。だがその一方、美術館の存在そのものが県民に浸透しているとはいえないところがあるのではないか。立地的に葉山館は風光明媚であり、鎌倉別館は鶴岡八幡宮の近くという有利な点があることから、その存在を広める取組をこれまで以上に様々に試みていただきたい。</li> <li>○ 所在する市町村の人口も異なるため、単純な比較はできないが、近隣同等施設と比べて中学生以下の入館者が少ない傾向にあると考えられる。横浜国立大学附属小中学校や近隣私立学校との連携、とりわけ県教育機関と連携しながら小中学校への周知等の工夫により一層の入館者数増加に努めていただきたい。</li> </ul>			

大柱	中柱	取組の内容		自己点検		
		1年間の目標値	実現方策	達成値	達成度	課題・対応の方向
利用状況	教育・普及事業への参加者	増加させる (前年度) 1,169人	ニーズを汲み充実に実をを図る	1,581人 (ただし、近代美術館入門講座の参加人数含む。配布924部、スタンプラリー等は除く。)	○	講座・イベントに加え普及教育教材の配布等を充実させ参加者の増加に努める。また、スタンプラリーについても継続的に実施する。
		第三者評価				
		評価のコメント及び今後の方向性等の提言	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 当館は、ユニークな視点での展覧会を行っている点において高く評価できる。その反面、教育普及において更なる工夫が必要であるように思われる。しかしながらスタッフの充実が難しい現状では、教材やワークショップの開発に相当の困難があることは理解できる。そこで求められるのは、市民との連携、教員との連携、他館との連携ではないだろうか。美術活動に参加できる市民や、ミュージアム・スクールのプログラムを開発できる教員との連携や、フリースクールの子どもの利用等、他館の取組の研究と情報交換を行い取り組んでもらいたい。</li> <li>○ なお、現在実施しているミュージアム・スクールは、学校団体の作品鑑賞からあまり広がっていないようである。学校連携や地域連携、教員用の特別講座も同様の課題がある。ミュージアム・スクールは、こうしたものを包括した概念であるが、全国の事例や海外の事例を参考に、もっと柔軟な芸術への導きを開発していただきたい。とりわけ立地が県東部に寄っていることから、貸し出しや移動博物館的教材の開発をさらに進めていただきたい。</li> </ul>			

	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ ダイバーシティやインクルージョンの視点から、特別支援学校等との連携教材を開発している点は高く評価できるが、さらに多様な利用者のための教材があってもよいのではないか。また、学校利用であっても、美術館の所蔵作品に限らず広く美術一般についてのものであってもよい。</li> <li>○ HPには、「映像・音楽・パフォーマンスなど」のイベントプログラムをこれから開発するとなっているが、美術の概念を拡げて、こうしたイベントを企画することはこれからの美術館にとって大きな意味があるので、これを是非進めてほしい。ただそれを現在のスタッフだけで企画することは難しいかもしれない。外部の市民や識者による相談会のようなものも考えてもよいのではないか。</li> <li>○ 県立の施設として教育・普及事業への参加者数だけでなく、オンライン・プログラムや教材の提供数を目標として明示すべきではないか。</li> <li>○ 取組内容は高く評価できる。県立館として対象や地域をどのように設定するか難しいところはあるが、幅広い展開を期待したい。館内外・オンライン・教材貸出等の様々なタイプについて個別に評価をしていく必要があると感じる。</li> </ul>
--	--

大柱	中柱	取組の内容		自己点検		
利用状況	インターネットアクセス	1年間の目標値	実現方策	達成値	達成度	課題・対応の方向
		増加させる(前年度)美術館ウェブサイトアクセス数 745,194件	改修したホームページを活用して訪問者のニーズに応える	642,627件	△	昨年度に比べ事業情報の発信においては積極的に実施したが総訪問者数、総参照ページ数ともに昨年度を下回る結果となった。利用者がインターネットアクセスしたくなる魅力的な展覧会、イベント等を企画し、美術館の利用促進に努める。
		<b>第三者評価</b>				
		評価のコメント及び今後の方向性等の提言	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 情報発信と切り分けてインターネットアクセスを設定するのであれば、そもそもWebサイトの役割・コンテンツ等についても考える必要があるのではないか。(SNS等ではなく)Webサイトならではの利用のあり方とコンテンツは要検討であると考えられる。</li> <li>○ ウェブサイトのアクセス件数の目標は、前年度比のみならず、類似する国内美術館や他の県立施設の実績値を参考にしたうえで、適切な目標値を設定することが望ましい。</li> <li>○ コレクション検索においては、IMAGEのあるものが収蔵作品の6分の1にとどまっているが、今後これを増やすことに努めていただきたい。</li> <li>○ 新しいHPは、非常に洗練されていてよくできていると評価できる。ただ親しみに少し欠けるようにも思われる。できれば、来館者の意見欄やワークショップの参加者感想等、来館者との一体感をだしてみてもどうか。</li> </ul>			

大柱	中柱	取組の内容		自己点検			
		1年間の目標値	実現方策	達成値	達成度	課題・対応の方向	
資料・収蔵品	活用	増加させる (前年度) 280点	県民共有の財産との観点から有効活用に努める	1,039点 (展示作品総数)	○	館内展示利用数、特別使用許可申請数ともに大幅に増加している、一方で館外貸出件数、画像貸出件数はほぼ横ばいであった。 今後も県民共有の財産の有効活用増加に努めていく。	
		18件	館内展示利用数				26件
		17件 35件 350件	特別利用許可申請数 館外貸出件数 画像貸出件数 計				16件 37件 1,118件
<b>第三者評価</b>							
		評価のコメント及び今後の方向性等の提言	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 他館への貸出が多く、それに時間が割かれることは理解できる。ただ、収蔵品の活用ということであれば、教育・普及事業を拡大していくことが求められる。</li> <li>○ このことに関連して貸出業務を円滑にするために、収蔵庫への出入りを常勤職員かその随伴に限られている現状を、十分な打合せを踏まえて、非常勤職員でも出入りできるように改善すべきである。</li> <li>○ 他館からの貸出要請は、相手のあることなのでその多寡を評価項目とすることは難しい。有効活用という視点では資料のデジタル化とその利用についても方針を定め、取り組んでいくことを求めたい。</li> <li>○ 特別利用の許可申請数や貸出件数は館の自助努力で達成される性質のものではないため、目標値とするのは不適切である。実績を参考数値に留めるべきである。</li> </ul>				

大柱	中柱	取組の内容		自己点検				
		1年間の目標値	実現方策	達成値	達成度	課題・対応の方向		
資料・収蔵品	維持管理	美術作品の保存に適正な環境を維持	PFI事業者には保存環境の維持履行を求め、職員として適正な取扱いを実施	ほぼ達成	△	業務計画書で定めた要求水準書において、一部改善を要する点があることから、PFI事業者への働きかけを強めていく。		
		<b>第三者評価</b>						
		評価のコメント及び今後の方向性等の提言	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 資料・収蔵品の保存に関わる維持管理は、美術館の中核的な事業であるため適切な実施体制を構築していただきたい。</li> <li>○ PFI事業者との関係であるが、PFI事業者の現場責任者と美術館の担当者とのやり取りに終始せず、事業者の本社と県の担当部署を交えた意見交換の場を通じて中長期的な課題を解決する仕組みが必要ではないか。</li> <li>○ その場合、現場の受付や警備の方との連絡をもう少し密に行うことが求められる。来館者に直接対応する、受付や展示室の監視員等の意見や提言を聴取できるシステム、あるいは展覧会前の作品についてのブリーフィングも、他館でも見られるような展覧会直前の通り一遍ではなく、よりしっかりと行うことが、結果的に維持管理にもつながるのではないかと。</li> </ul>					

大柱	中柱	取組の内容		自己点検		
調査研究	研究成果の公開（発表・印刷物等）	1年間の目標値	実現方策	達成値	達成度	課題・対応の方向
		増加させる (前年度)	研究成果を積極的に公開し美術館員の学術成果を発信する			文献等の執筆数、図録等執筆数、新聞・雑誌等寄稿数、学会や研究集会での発表件数については、増加しており今後も継続して研究成果を積極的に公開等する。 一方で、専門的な講座件数、競争的外部資金の獲得件数については、減少しており、件数向上に努める。
		4件 7件 5件 10件 0件 6件	文献等の執筆数 図録等執筆数 新聞・雑誌等寄稿数 専門的な講座件数 学会や研究集会での発表件数 競争的外部資金の獲得件数	8件 10件 15件 4件 5件 4件	○	
<b>第三者評価</b>						
		評価のコメント及び今後の方向性等の提言	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 前年度比で各項目において増減はあるが、総数としては増加傾向にある。研究成果の発表としては十分な数であり、引き続きこの水準の維持に努めていただきたい。</li> <li>○ 研究成果の公開は着実に実行されており、この規模を維持・拡充されたい。競争的外部資金の獲得については組織としての戦略性をもって適切な規模を獲得することが肝要である。</li> <li>○ 館員の活動は、年報をよく見ると書いてあるが、HP上に学芸員の専門紹介があってもよいのではないかと。どういう方がいて、どういう活動をしているのかという情報は、外と繋がる重要なものであり、それによって外から見えるようにすることが大切ではないだろうか。</li> </ul>			

大柱	中柱	取組の内容		自己点検		
情報発信	事業情報の発信	1年間の目標値	実現方策	達成値	達成度	課題・対応の方向
		増加させる (前年度)				各展覧会、展示作品、講座、イベント情報、カタログフェア等をX(旧Twitter)に投稿し、積極的に広報活動を行った。 引き続き、魅力的なコンテンツを作成し、着実な情報発信に努める。
		6,763件 8件 323件 8件	X(旧Twitter)フォロワー数 参考資料送付件数 SNS投稿数 ポスター・チラシ発行件数	7,827件 8件 523件 8件	○	
<b>第三者評価</b>						
		評価のコメント及び今後の方向性等の提言	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ SNSの活用においては近年、画像やショート動画による発信が若者層への告知に有効であり、インスタグラム等における画像、動画投稿の充実に取り組みたい。</li> <li>○ SNSはその媒体ごとに特徴があるので、それを踏まえた展開が必要である。また、ポスターやチラシ等の従来型の非デジタルな媒体も対象やチャンネルによっては有効である。どちらにしてもインターネットや情報発信等の広報関連についてはマンパワー不足が顕著なので増員が必要不可欠であると考えられる。</li> <li>○ 広報については、一度根本から見直す必要がある。見直すとは、広報の概念を捉え直すことである。広報とは、必ずしもなんらかのメディア（ポスター等の印刷物やHPなど）を通じての情報拡散ばかりではない。PRとは、自己</li> </ul>			

		<p>宣伝ではない。PRとは、Public Relations の略で、みずからの望ましいイメージおよびその施策や事業内容・主義主張などについて広く知ってもらい、協力してもらう活動のことである。そうした面からすると、例えば下記の点等を考えてみてはどうか。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>a. 地域のタクシー業者との連携（客を連れてくる場合は、乗務員と駐車場を無料にする等）の工夫</li><li>b. PFI 事業者とりわけ警備員や入りロスタッフとの緊密な連携と展覧会内容についての理解と来館者への案内の重視</li><li>c. 近隣市町村の教育・観光などの職員への案内や観覧招待</li><li>d. 近隣住民の無料招待会の開催</li></ul>
--	--	---

大柱	中柱	取組の内容		自己点検		
		1年間の目標値	実現方策	達成値	達成度	課題・対応の方向
		(予算ベース) 51,224千円  (前年度実績) 57,632千円	展覧会の鑑賞を通じて県民の近代美術に対する知識及び教養の向上を図る	39,857千円	×	鎌倉別館、葉山館で実施した展覧会のうち、一部展覧会を除き想定よりも観覧料収入が伸びず不調であった。 このことから令和6年度においては、現在の広報活動に加え、美術専門誌への掲載委託を予算に計上することで全国の美術に興味を持つ層の人々等へ広報することで観覧料収入の増加を狙う。 図録については、展覧会場とミュージアムショップが別棟であることから観覧者が図録の存在に気付かない場合が多くあった。 図録によって展覧会内容をより深めていただき、売り上げも向上させるため、エントランス内に図録を自由に手に取って見られるスペースを新設したり、図録の魅力を紹介する手書きのポップを作成したりすることで観覧者とのタッチポイントを増やした。 結果として観覧料収入に反して図録収入の売り上げを増やすことができた。
		<b>第三者評価</b>				
	施設運営等  観覧料及び事業等収入	評価のコメント及び今後の方向性等の提言	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 美術専門誌への掲載委託等の対応を取ることが重要である。美術ファンへ確実に届けて観覧料収入を確保することはもとより、値上げ等類似施設の動向を見据えた上で適切に料金を設定する。ただし、若年層の無料化や割引を考慮する必要がある。</li> <li>○ 観覧料収入の増加は、単純に人数×価格であるため、どちらか若しくは両方の数字を上げる以外の手段はない。近年、特別展・企画展の価格は上昇傾向にあり、公益性を損なわない範囲で適正な価格設定を検討することも必要かと思われる。              また、事業収入は観覧料収入と図録の販売収入だけではない。少額であっても収入の多角化を検討すべきである。特に、近代美術館指定のまなびや基金寄付とその活用はもっと積極的に取り組むべきである。</li> <li>○ 観覧料については、現状が非常に複雑で、割引等が重層的で分かりにくいようである。割引の取扱いも含めると30種に及ぶ現状は見直すべきではないか。</li> <li>○ 外部資金ということであれば、県内の企業とのコラボも検討してはどうか。それには2つの方向がありうる。1つは、展覧会やイベントあるいは教材作成のための資金提供の方向。そしてもう1つは、観光会社等とのコラボである。立地からみてもその余地はあるのではないかと。例えば、近くの結婚式会社とのコラボができれば、前撮り写真の場として提供するということが考えられる。また、逗子駅近くのタクシー会社との協働も考えられるのではないかと。</li> </ul>			

大柱	中柱	取組の内容		自己点検		
施設運営等	施設点検	1年間の目標値	実現方策	達成値	達成度	課題・対応の方向
		(記述式) 一層魅力ある施設を作る	職員自ら他者目線で点検する	職員自ら PFI 事業者とともに修繕箇所や不具合がないか確認を行っており、発見した修繕箇所は修繕計画に反映させている。	○	安全な施設運営を実現できている。引き続き、安全で快適な施設の維持とともに、誰にも開かれたインクルーシブな施設環境を目指し、点検結果を修繕計画や事業計画に反映させ、適切な施設点検を行っていく。
		<b>第三者評価</b>				
		評価のコメント及び今後の方向性等の提言	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 魅力的な施設及び安全で快適な施設の維持は、ハード（建物）だけではなく、ソフト（サインや接遇等）も重要なポイントになる。施設点検の際にはソフトの視点も組み込んでいただきたい。</li> <li>○ ネット環境が非常に悪く、改善を要するのではないか。また、ロッカーも大きな荷物をもつインバウンド客等に合っていない。</li> <li>○ 点検結果をもとにした解決策においては、PFI 事業者の本社と県の担当部署を交えた意見交換の場を通じて中長期的に対応する体制を確立する必要がある。</li> </ul>			

大柱	中柱	取組の内容		自己点検		
施設運営等	自己研鑽及び他館の研究	1年間の目標値	実現方策	達成値	達成度	課題・対応の方向
		(記述式) 積極的に研修に参加させるとともに他館との情報交換・共有に有益な会議等への参加を増やす。	研修に参加しやすい環境を整える。オンライン方式により会議・研修を行う。	社会包摂などに関する研修を行う。	△	自己研鑽として学芸員等がそれぞれの専門分野を深め、学会や研究会、刊行物での発表をできる環境を整える。また、他館の職員と意見交換の場を持ち、他館の運営についての知識を得るように努める。
		<b>第三者評価</b>				
		評価のコメント及び今後の方向性等の提言	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 社会包摂等に関する研修等に自己研鑽のため参加している点を評価できる。社会包摂は今日的な博物館の社会的役割において重要なテーマのひとつであることから継続して取り組んでいただきたい。</li> <li>○ 他館の職員と意見交換の場を持ち、他館の運営についての知識を得るためには、神奈川県博物館協会、全国美術館会議、日本博物館協会等の横断的な組織による大会、研修会等に職員が積極的に参加して知見を組織内で共有できるようにすべきである。</li> <li>○ 上記のような同業者や学会等で研鑽を積むことは第一である。だがもう一方で、さまざまな現代的な社会問題や、他の分野、さらには一般の市民の人々の考えを聞くことは、展示という一般向けの教育活動を行うことのヒントや姿勢につながっていく。そうしたことから、展示テーマについての歴史的・文化的・社会的な視点も積極的に考えていただきたい。それが展示の厚みに繋がることになると思われるからである。</li> </ul>			

## 2 施設別評価 (全館共通項目以外の各施設固有の機能、役割、特性等に関する評価)

(項目 1) 鎌倉別館のあり方の明確化	
<p>評価のコメント及び今後の方向性等の提言</p>	<p>葉山館と鎌倉別館のそれぞれのあり方が明確ではなく役割分担が明示されていない。そのことで事業展開と施設運営に課題が生じている。まず、双方の役割を明確にした上で、特に鎌倉別館の特色を出し事業展開することが求められる。これを機に社会教育施設評価書の目標設定に、鎌倉別館の役割、取組を明示する必要がある。</p> <p>鎌倉別館の展示においては収蔵品の公開と新進作家の紹介等が重要になると思われる。収蔵品の公開についてはどのような切り口で見せていくか、展示テーマの軸を設定する必要がある。新進作家の紹介については取組名を設定する等して積み重ねることで、関係者や美術ファンに対するブランディング化にも取組み、認知度を高める必要がある。鎌倉別館の特色を明確にすることで広報・発信の方策も自ずと焦点が定まる。</p> <p>広報・プロモーションを強化するためには、観光都市の鎌倉市との連携強化が必須である。美術館から鎌倉市の観光部局への働きかけだけでなく、県から市へ依頼する等組織的な対応が求められる。</p> <p>施設名についても既に鎌倉本館が存在しないため、「鎌倉別館」というのはわかりにくい。これを機に対外的には例えば「神奈川県立近代美術館鎌倉」「神奈川県立近代美術館葉山」を通称とする等適切な名称で発信すべきである。</p> <p>また、施設運営の体制強化が必要である。鎌倉別館を担当する学芸員の配置を明確にして、3、4年専従する等腰の据えた体制づくりをする必要がある。鎌倉別館の責任者を例えば「副館長(鎌倉別館担当)」あるいは「鎌倉別館統括」を配置する等運営の自律性を促すことで、より効果的な館の運営につなげるべきである。</p>
(項目 2) PFI の運用	
<p>評価のコメント及び今後の方向性等の提言</p>	<p>神奈川県立近代美術館のPFIは、維持管理・運営の事業期間30年のうち2/3が経過している。30年という事業期間を10年ごとに前期・中期・後期と区切った場合、既に後期に入っている。今後は、現在の運営状況の総括を行いながら、事業期間終了後にどのような体制で運営を続けるのかについて検討を始めるフェーズにあると考えられる。</p> <p>本PFI事業は、立地に起因する高度で大型な設備・施設等の維持管理を明確に切り分ける等、手法について一定の評価ができる。しかし、附帯事業である葉山館の駐車場、喫茶・レストラン、ミュージアムショップの運営は、利用者と接する最前線の業務であり、SPC(特別目的会社)側のスタッフ等とのより実体のある有機的な連携が必要不可欠であると考えられる。一部では新たな試みもあるようだが、特定の事業だけではなく現場レベルでも経常的に情報・意見交換ができる環境を整備できるとよいのではないかと。</p>

### 3 総括評価

#### 総括

- 神奈川県立近代美術館は社会教育施設評価書において目標を設定し、それにしたがって事業を展開している。基本的な学芸活動は着実に実施しているが、広報・プロモーションや地域連携については、課題を抱えており改善が求められる。多文化共生についても情報発信における英語表記に留まり、多文化共生を目指すのであればそれに相応しい対応を見出す必要がある。また、県立施設としての広域的な事業展開においてもどんな施策を取ることが効果的か、基礎自治体のニーズを把握し検討が待たれる。

神奈川県立近代美術館は、その歴史と伝統に裏付けられた確かな博物館活動が今日において連綿と続けられており、特に企画展や調査研究等の事業は高く評価できる。その一方で、博物館経営については一層の努力が必要であると考えられる。
- 博物館経営は大きく分けて①経営体制（システム）と②PRの構築の2点に分けられる。まず①経営体制について、その主要な点は鎌倉別館と人的資源管理に集約される。葉山館と鎌倉別館の2館体制になった今日では、その距離的な隔たりが過剰なコストとなってネガティブな影響にある。鎌倉別館については、その位置付け・役割等から管理手法に至るまで抜本的に考え直す機会を設けるべきである。例えば、今すぐできることであれば、葉山館と休館日（月曜日）を同一にしているが、休館日をズラす、休館日を増やす、企画展のサイクルを葉山館とズラしながら展示替えのための休館期間を長く設定する、開館期間を繁忙期に集中させる等によってスタッフの往復や張り付きを減らすこと等も考えられるのではないかと。

人的資源管理については非常勤スタッフの多さを改善すべきである。日本の博物館業界は、多くの非常勤スタッフに支えられている現状にあるが、それを踏まえても相対的に非常勤スタッフが多いと言える。非常勤スタッフを減らして、その分を常勤の雇用に充てる。または常勤と非常勤の職務権限を見直す等によって効率的な人的資源の活用を試みるべきである。

②PRの構築は、字義通り Public Relations、公衆（社会）との間に良好な関係を築くことである。その第一歩として、専従（常勤）のPRスタッフを雇用すべきである。神奈川県立近代美術館は、素晴らしい博物館活動を展開している一方で、その存在や活動内容を広く周知できていないことが大きな問題である。PRスタッフは広告を中心としたグラフィックデザインだけではなく、モノとコトの両方にアプローチできるプロデューサー的な職能を求め必要がある。また、地域連携や中長期的な経営戦略の立案等の博物館経営に関することについては、有識者を招いた会議体等を組織して意見を聞いた方がよいのではないかと。組織運営上、公的に位置付けられた会議体を設けることがコスト高になるのであれば、アドバイザー的な存在の専門家を館長が気軽に意見を求めることができるような形で委嘱してもよいのではないかと。さらに、館の最前線で来館者と接するPFI事業者のスタッフとの意見交換等もより密に行う必要性も感じる。

一般的に言えることは、収集保存・調査研究・展示教育といった博物館の事業活動に関しては高いレベルにあり評価できるが、それ以外の特に経営周りについて十分に取り組めていない現状にある。それも全てはマンパワー不足に起因していると考えられるため、①経営体制の見直しを行いながら、足りない人的資源に関して様々な形で補完していくことを計画すべきである。
- 神奈川県立近代美術館は、入館者数及び教育普及の面において改善が求められる。日本の近代美術を牽引してきたこれまでの実績をより広く県民に知らしめるためにも、新体制のもと、近隣の博物館の活動を参考にして積極的な改善を目指していただきたい。単純に入館者数を増やせばよいというものではないが、近代美術ということであれば、今日の美の観点の範囲は広いと考えてもよいのではないかと。既に一部そうしたコンセプトでのワークショップの試みもなされていることから、これをさらに発展させて、様々な分野とのコラボレーションを模索していくことは、県民に対する重要な文化提供になるものと思われる。
- 2022年度から始まった高校の探究学習との協働も今後考えてもらいたい。探究学習は、従来の調べ学習ではなく、社会課題への提言を目指す自律的探究の場である。これに対しては、美術においても積極的に関わっていく必要がある。それは、デザイン思考を求めることだからである。こうしたことは、美術館の活動を幅を拡げ、さらに市民に寄り添った場へと発展する可能性を開くことに繋がることになるのではないかと。
- 今日の博物館・美術館の重要な取組にあげられるのは、市民活動の中核となってより自立した市民育成の場となることである。この観点からすれば、美術館は、作品を展示するギャラリーとしての機能から、市民とともに地域社会と文化を育てていく場へと転換していくことが求められている。教育普及とは、かつての博物館が目指した市民啓蒙ではない。すなわち博物館は、有益な文化情報を「発信するメディア」ではなく、市民を結びつけ新たな文化を共に生み出す「媒介するメディア」とならなくてはならない。

県教育委員会  
による支援等  
の方策

- PFI 事業者との協議や広報・プロモーションに関わる基礎自治体との連携については、施設だけで負いきれない事柄については設置者として県教育委員会としての役割を發揮することを期待する。
- 認知度の向上や利用者の増加について広報プロモーションの体制強化が課題である。専任できる職員の配置や外部専門家の登用等、職の設置者として条件整備をおこなう必要がある。
- 県教育委員会には①柔軟な財務と②人員の補充の2つを求めたい。①について公立館は独自の財源を持つことは困難であると考えられるが、近代美術館指定のまなびや基金寄付とその活用をより進めていき、インセンティブとなりえるような財源の確保を協働で進めていってもらいたい。まなびや基金については、様々なシーンで PR 等に努めていることが伺えるが、十分認知されているとは言い難い状況にあると考えられる。美術館と協働して、さらなる認知向上及び基金の増加・積極的な活用への取り組みに挑戦してほしい。予算が厳しい中で総額が小さくとも独自財源を持てることは経営の励みになることが期待できる。
  - ②については他施設・他館ともに厳しい状況であることは理解できるが、神奈川県立近代美術館には必要な投資であると考えられる。それには、現状の経営体制の見直しが必要不可欠であるが、組織の再構築だけでは極めて困難であることが予想される。また中長期的にはPFIの事業期間終了が近づく中で、大きな枠組みでのより良い経営体制の再考も県教育委員会に求めたい。
- 神奈川県立近代美術館は、立地の素晴らしさと保有美術品の数及び質において特別の地位をもっていることは、美術館界のいわば常識である。これほどの施設を活かすには、十分な人材の確保が最優先されなくてはならない。今日のインバウンドの時代において、県はこの資源の重要性に気づくべきである。

また、博物館は学校教育に比べて必ずしも重視されない傾向があるが、全国で見た場合、その役割は極めて効率のよい安上がりな施設だということは指摘しておかなくてはならない。わずか8,400人ほどの学芸員で3億人の来館者にサービスをしているのが日本の博物館である。対して学校は、1,240万人の児童生徒に対して、5万人の教員である。もちろん単純な比較はできないが、学芸員一人が対応する人数は、教員一人の実に20.85倍にもなる。こうした現状を認識して、抜本的な財政的手当を見直すことは、本県の発展に資するものと思量する。

《資料》学校基本調査、文化庁HPより

〔日本の小中高等学校・2023年〕

学 校 数=35,157校

児童生徒数=12,406,918人

教 員 数=4,993,174人

〔日本の博物館・2018年〕

博物館数=5,738館

入館者数=303,069,000人

学芸員数=8,403人